

原因理由を表す「によりて」について

—漢文訓読の影響をめぐって—

楊 瓊

1. はじめに

古代日本語の原因理由¹⁾を表す表現は、「ば」を中心に、「に」「て」などの助詞が担っていた。ただし、それらの助詞は、原因理由を表す用法はあるが、それ以外に多様な用法を持っており、原因理由用法の認定は文脈によるものとされる²⁾。これら多義的な形式に対し、因果関係をより明確にする表現として、「(が) ゆゑに」「によりて」「あひだに」「ほどに」などのような複合形式が後に発達するようになった。

これらについて、山口(1996)は、場面性の関係表示を基にした「あひだに」と「ほどに」が、原因理由をはっきり表すようになったのは鎌倉時代末期や室町時代以降としている³⁾。小林(2005)では、「あひだに」と「ほどに」が順接確定条件の表現形式として発達することは、条件表現史における「文法化」の一現象として捉えられると指摘している。それらより早く古代語の中においても定着したものと、「(が) ゆゑに」「によりて」が挙げられる。この両者は早く続日本紀宣命に用例が現れ、漢文訓読の影響の濃いものとして、築島(1963)や小谷(1971)で取り上げられたことがある。これについて、山口(1993)は、漢文訓読の影響というためには、その語法が日本語内部には自

然発達し得ないような翻訳的語法であるか、それとも、日本語内部に発生した語法が日常会話語としては滅びており、漢文訓読によって伝えられていた語法であるか、を峻別する必要があると指摘した。この問題について、筆者は拙稿(2016)で、原因理由の接続表現として「(が) ゆゑに」の成立には漢文訓読の影響があったことを論じたが、「によりて」の原因理由用法については、拙稿(2017)で、次に示す例のように、上代語において既に成立しているものであり、漢文訓読と関わらず、日本語内部において独自に文法化したことを述べた。

(1) 初花の 散るべきものを 人言の 繁き
によりて(尔因面) 淀むころかも(万葉集4・630)

例(1)における「によりて」は、「……に起因する」という意であり、前件の「人言の繁き」が後件の「淀むころかも(通うことが途絶える)」を引き起こす原因となることを示している。このように、原因と結果を結び付ける用法は、古代の和歌・散文に多く見られるものである。

ところが、院政鎌倉時代になると、次のような用法が説話や軍記に多く見られるようになる。

(2) 『我レ、此功德ニ依リテ人天ニ生レテ
富貴ヲ得ム。』(今昔・巻二ノ12)

例(2)における「ニ依テ」は、原因理由

を表しているが、単に前件と後件を因果的に結び付けているのみではなくて、「功德のおかげで」という意味で、動作主にとって「富貴ヲ得ム」のような好ましい事態の成立に役立つということを表している。このようなよい結果の原因を表す点は、単に原因と結果を結び付けるだけの例(1)の用法と異なり、意味上の特徴となっている。本稿では、このような用法を原因理由の「プラスの用法」と呼び、漢文訓読、特に仏教漢文の訓読の影響で成立し、和漢混淆文の中で定着した経緯を論じていく。なお、本稿の調査⁴⁾では、原因理由の用法で、かつ、体言に接する「によりて」の例に絞る。ただし、用言に接する「によりて」について、その前件は準体句と解せるものもあるが、接続助詞としても解せ、主に客観的事実を叙述する場合で単なる原因理由を示す用法で用いられるため、ここでは考察対象から省く。また、依拠を表す例³⁾、慣用表現「なに(ごと)によりて」「たれによりて」、接続詞「これによりて」に含まれるものも考察対象外にする。

2. 和文系資料における「により(て)」の用法

ここでは、万葉集と中古和文(以下、和文系資料と呼ぶ)における原因理由を表す「により(て)」の用法を見ていく。

注意すべき点は、用法の特徴として、和文系資料における「により(て)」は、原因と結果を結び付ける論理的な表現として、動作主にとってマイナス的、またはニュートラル的な結果をもたらす例にほぼ限られることである。ここでは、これらを「プラスの用法」と対照的に捉え、「非

【表1】和文系資料における用法

資料	プラス	非プラス	計
万葉集	0	16(3)	16
竹取	0	0(0)	0
伊勢	0	0(0)	0
土佐	1	1(0)	2
大和	0	2(1)	2
平中	0	1(1)	1
蜻蛉	0	4(0)	4
落窪	1	4(0)	5
枕草子	0	0(0)	0
和泉式部	0	1(1)	1
源氏	0	36(10)	36
紫式部	0	0(0)	0
堤中納言	0	0(0)	0
更級	1	0(0)	1
大鏡	1	9(7)	10
讃岐	0	0(0)	0
古今集	0	3(2)	3
物語和歌	0	6(3)	6
計	4	83(28)	87

※和文の和歌は「物語和歌」に集めた。

プラスの用法」と名付けておく。両用法の和文系資料における使用状況を【表1】に示した。また、参考に明らかにマイナス的な用例の数を()内に示した。

【表1】に示したように、全87例中、非プラスの用法が83例を占めている。

- (3) 男、女、あひ知りて年経にけるを、いささかなることによりてはなれにけれど、(大和)
- (4) 「また女人のあしき身を受け、長夜の闇にまどふは、ただかやうの罪によりなむ、さるいみじき報いをも受くるものなる。」(源氏・夕霧)
- (5) 二条院の上は、まだ渡りたまはざりけるを、この試薬によりぞ、えしづめはてで渡りたまへる。(源氏・若菜下)
- (6) 御病により金液丹といふ薬を召したりけるを、(大鏡・天)

用例の内容を見ると、例(3)は「ちょっとしたことのせいで、別れてしまった」という意であり、例(4)は「愛欲の罪のせいで、恐ろしい報いを受ける」という意である。これらの例の「により(て)」に続く内容は動作主にとって好ましくない事柄と言えよう。また、例(5)は「試楽のためにお帰りになった」という意であり、例(6)は「ご病気のために薬を服用なされていた」という意である。これらの例では、「により(て)」に続く内容がニュートラル的な事態として、事柄を客観的に述べる文に用いられている。

一方で、プラスの用法で用いられる「により(て)」が4例見られる。

- (7) おぼろけの願によりてにやあらむ、
風も吹かず、よき日出で来て、漕ぎ
行く。(土佐・二十一日)
- (8) <世次>「おほかた昔は、前頭の拳により
て、のちの頭はなることにてはべ
りしなり。」(大鏡・地)
- (9) <別當>「仏師にて、仏をいと多く造り
たてまつりし功德によりて、ありし
素姓まさりて人と生まれたるなり。」
(更級・宮仕えの記)

- (10) <大納言>「御徳により、面目ある目
を見はべりつる」と、(落窪・卷之四)

これらの少数の例は、いずれも男性作者の作品や、漢文の素養が高い人の会話文に見られる例である。また、「により(て)」が「願」「拳」「功德」「徳」のような漢語に接する点からも、これらの出現は和文の中で例外的なものであり、漢文訓読の用法で用いられたものと推測される。さらに、和文では、「により」の形で現れる例が用例全体の大半を占めるが、プラスの用法の全4例の中で、例(7)(8)(9)

のように、3例が漢文訓読文で一般的な「によりて」の形を取っていることから、この用法が漢文訓読とのかかわりが大きいことが窺える⁶⁾。

このように、非プラスの用法の「により(て)」は、歌、日記、物語、随筆に広く用いられ、和文系資料において定着していると見られる。

3. 漢文訓読文における「ニヨリテ」の用法

次に、漢文訓読文の中でプラスの用法の発生の原因を検討したい。

『訓点語彙集成』(築島裕編、汲古書院)によると、「ヨル」は「依」「因」「由」「據」をはじめ、57漢字の訓として用いられる。万葉集の歌においては、このうち、「依」「因」「縁」が「ヨル」の表記として用いられており、その原義「寄る」およびそこから発生した意味を表しうる漢字として早くから結びついていた。また、平安時代の訓点資料では「憑」「據」「仗」「乗」などの字に、「依」をもってそれらの訓字として用いられることがあり、古記録や和漢混淆文においても、「ニヨリテ」の漢字表記は殆ど「依」である⁷⁾。したがって、平安時代以降の日本人が書いた文章では、漢字「依」と「ヨル」の結びつきがより定着していると考えられる。

漢字「依」は、『説文解字』に「依、倚也」とあるように、本来「もたれる(倚)」という意であり、『篆隸萬象名義』に「依、怙、助」とあるように、「たのむ/たよる(怙)・たすく(助)」の意もあるが、これまでの字義の研究や注釈によると、原因理由の意はないようである⁸⁾。筆者も論語、史記のような漢籍資料を調べた結果⁹⁾、確

かに、「依」に原因理由を表す例は見られなかった。

しかし、これらの研究における用法の記述はあくまで漢籍の用例に基づいたものであるため、仏教漢文の用例に注目しておく必要がある。これは仏教漢文には「依」で原因理由を表す用例が確認できるからである。以下では、平安初期から院政鎌倉期にかけての訓点資料で「ニヨリテ」と訓まれた実例をもとに、原因理由を表す用法と漢字の傾向を確認する。用法別の用例数を文献ごとに示したのが【表2】であり、用法を漢字別に示したのが【表3】である。なお、明らかにマイナス的な用例の数は()内に示した。

まず、元になった漢字の用法の傾向を確認しておく。【表3】によると、「由」「因」「依」の出現頻度が高く、常用的である。注意すべきなのは、非プラスの用法は、「由」「因」「縁」「為」のような原因理由を表す意味の強い漢字に限って見られるのに対して、プラスの用法は、「為」を除くと、すべての漢字にわたって見られることである。とりわけ出現頻度が高い「依」には、非プラスの用法がなく、用例のす

べてがプラスの用法であることが注目される。原因理由のプラスの用法で現れる場合では、「依」は「たのむ/たよる(怙)・たすく(助)」という意味を基盤に、文脈的に「……に頼って/の助けで、……」という意味で、良い結果の原因を積極的に言う表現となったのであろう。

次に、これらの字を訓読した「ニヨリテ」用法を見ると、【表2】に示したように、仏教漢文に集中しており、非プラスの用法が65例あるのに対し、プラスの用法が124例に上る。

まず、和文系資料の「により(て)」と共通する非プラスの用法を確認する。

- (11) 何以故、慳貪に由(り)て、〔於〕生死の中にして、諸の苦悩を受く。(金光明最勝王経・巻七127-20)
- (12) 数百年前ノ前ニ雷震ニ因(リ)テ山崩ル。(三蔵法師伝・E巻五418)
- (13) 求法ニ因(リ)テ朋友ヲ尋ネ訪フ。(三蔵法師伝・C巻九385)

上記の例(11)と(12)では、前件の「慳貪」「雷震」のような抽象物や事柄が原因で、後件の「苦悩を受く」「山崩ル」のような望ましくない事態が引き起こされる。

【表2】漢文訓読文における用法

資料	プラス	非プラス	計
金光明最勝王経	49	11(6)	60
三蔵法師表啓	1	0(0)	1
地藏十輪経	53	30(20)	83
南海寄帰内法伝	0	4(2)	4
妙法蓮華経	1	0(0)	1
三蔵法師伝	18	17(4)	35
白氏文集	0	2(2)	2
論語	0	0(0)	0
史記	0	0(0)	0
莊子	0	0(0)	0
遊仙窟	2	1(0)	3
計	124	65(34)	189

【表3】用法と漢字の対応

漢字	プラス	非プラス	計
由	65	32(20)	97
因	13	23(11)	36
依	31	0(0)	31
縁	3	4(1)	7
憑	5	0(0)	5
為	0	4(2)	4
従	2	2(0)	4
託	1	0(0)	1
資	1	0(0)	1
籍	1	0(0)	1
頼	1	0(0)	1
乗	1	0(0)	1
計	124	65(34)	189

例(13)は、「求法」のために、「師友ヲ尋ネ訪フ」という意であり、行動を引き起こす理由(目的)を客観的に述べている。これらの用法は、和文系資料における「により(て)」の用法と重なっている。

一方で、和文系資料に極少数にしか見られないプラスの用法が豊富に見られる。

(14) 此は一切の功德善根に依(り)て〔而〕生起すること得。(金光明最勝王經・卷四61-5)

(15) 諸有ノ悪業、今ノ小疾ニ因(り)テ竝(ヒ)ニ消エ祿ケルコトヲ得タリ。(三蔵法師伝・C卷十114)

(16) 此の經の威力に由(り)て、能ク諸の災横を離レ、及餘の衆の苦難をも、皆除滅せず〔不〕といふこと無クむ。(金光明最勝王經・卷一5-10)

(17) 師(ノ)〔之〕寿命、今自(り)已去、更(ニ)十年可(り)ナリ、若(シ)餘福ニ憑(り)テ轉續セムコトハ、(三蔵法師伝・E卷五11)

(18) この定力に由(り)て〔令〕彼の佛土の一切の有情をして、皆悉、同(じく)諸の三魔地の所行の境界を見しめム。(地蔵十輪經・卷一214)

例(14)～例(18)において、「ニヨリテ」の前件は、威力、功德、善根などのような恵みや利益をもたらす物事となっている。後件では、例(14)と(15)のように、「V+コト(ヲ)得」のような構文を取るのが最も代表的である。また、例(16)(17)のように、「苦難を除滅す」「寿命が転続す」のようなプラスの意味合いを含む表現が続き、後件を「……ことができる/できた」と補って言うほうが、より安定感がある場合がある。さらに、例(18)のように、使役文が後続する場合は、仏典系

資料に多く見られ、仏に勧請する時に用いられる典型的な文型と考えられる¹⁰⁾。これらの例における「ニヨリテ」は、「……に頼って/の助けで……」の意味合いを基盤にしながら、「……が原因/きっかけで……」結果的に望ましい事態が成り立つという意となる。

ここで、例(14)と例(17)の「依」の用法に注目したい。例(14)は「依」字で良い結果の原因を表す例である。このような例は金光明最勝王經、三蔵法師伝、地蔵十輪經のような仏教漢文に合計31例見られる。一方、漢籍系の遊仙窟に、プラスの用法は2例のみ見られるが、それらの例は「因」を用い、「依」を用いていない。このことを考えると、「依」を原因理由のプラスの用法に用いることは仏教漢文の特徴と言える。さらに、例(17)では、「憑」の訓み、あるいは、意味を示す訓字として「依」が用いられることから、僧侶の常用漢字になっていると考えられる。山本(2005)によれば、接続詞「これによりて」を漢字で表記するときに、書き手が僧侶である場合、「依之」を選択する傾向が俗家より強いという。これらのことをふまえると、「依」をもって原因理由を表す用字法が僧侶の世界で定着していると考えられる。

以上のように、漢文訓読文では、「ニヨリテ」が「依」「因」「由」などのような意味的類縁性がある漢字の訓として結びつくことにより、固有日本語¹¹⁾には見られなかった原因理由のプラスの用法が生じていると考えられる。

4. 院政鎌倉時代における用法の受容

3節では、漢文訓読文における「ニヨリ

テ」の多くは、和文系資料における「により(て)」の基本的用法と異なり、独特のプラス的な表現価値を担っていることを述べ、その要因は主に仏教漢文の「依」の用法を摂取したことに求められることを明らかにした。ここでは、院政鎌倉時代資料の中で、プラス的用法が仏教説話集や軍記物語のような和漢混淆文や、和漢混淆現象が見られる和文系の文章にも取り入れられていることを確認する。この時代の資料における原因理由を表す「によりて」の用法を【表4】に示した。

前述したように、中古の和文系資料では原因理由の非プラス的用法は定着している一方で、プラス的用法はわずか4例のみであり、未だ異質的な存在と考えられた。ところが、【表4】に示したように、院政鎌倉時代になると、説話や軍記のような和漢混淆文の中に「によりて」のプラス的用法が増加し、一般化する傾向が見られる。特に、今昔の天竺震旦部、三宝

絵、法華百座聞書抄、金沢文庫本仏教説話集のような仏教説話集や、三教指帰注、光言句義釈聴集記、歎異抄のような教育的な資料では、プラス的用法の用例数が非プラス的用法を上回っており、多用されていることがわかる。

- (19) 金剛般若経ヲ轉讀シ給ヒシヲ聞シ
 功德ニ依テ、今、人間ニ生ズル事可得シ。(今昔・巻七ノ10)
- (20) 其も前世ノ福報ニ依コソ、其帯も得メトナム語り傳ヘタルトヤ。(今昔・巻二十六ノ12)
- (21) 臨終十念ニヨリテ、カナラス極樂ニ往生スヘシ。(法華百座・ウ377)
- (22) 月蓋長者ガ祈請ニヨリテ、龍宮城ヨリ閻浮檀金ヲ得テ、(延慶本平家・上247㊸)

例(19)～例(22)に示したように、「によりて」は前件「功德」「福報」「臨終十念」「祈請」が後件「人間ニ生ズル事可得シ」「帯も得メ」「極樂ニ往生スヘシ」「閻浮檀金ヲ得テ」のような望ましい事態の成立の原因を示している。

とりわけ用例が多く見られる今昔を見ると、「ニ依テ」は、全体的に天竺震旦部と本朝仏法部に偏るが、天竺震旦部ではプラス的用法が優勢であるのに対して、本朝仏法部では均等的であり、本朝世俗部では非プラス的用法が優勢となっている。今昔の文体は、巻二十を境に漢文訓読体と和文体に偏る特徴があることに鑑みれば、このような分布は、プラス的用法が漢文訓読調との関わりが強く、非プラス的用法が和文調との関わりが強いことを示している。ただし、プラス的用法で用いられる「によりて」は、今昔の本朝世俗部や宇治拾遺物語のような和文調に

【表4】院政鎌倉時代資料における用法

資料	プラス	非プラス	計
天竺震旦部	72	60(39)	132
本朝仏法部	71	71(39)	142
本朝世俗部	8	21(8)	29
今昔全体	151	152(86)	303
三宝絵	11	5(2)	16
法華百座	5	4(2)	9
金沢本仏教	6	3(3)	9
十訓抄	4	15(6)	19
沙石集	24	32(16)	56
宇治拾遺	4	16(10)	20
延慶本平家	20	49(20)	69
高野本平家	12	35(26)	47
徒然草	0	0(0)	0
三教指帰注	1	0(0)	1
光言句義	3	1(0)	4
歎異抄	1	0(0)	1
計	242	312(171)	554

傾く資料にも用例が見られ、院政鎌倉時代頃の文章で、ある程度定着していることが窺える。このことを裏付けるために、今昔の「二依テ」を出典漢文の翻案との関わりからより詳しく検討しておく。

以下では、岩波日本古典大系本で天竺震旦部の出典とされる三宝感応要略録、冥報記、孝子伝、本朝仏法部の出典とされる法華験記、日本霊異記、日本往生極楽記との関係と比較してみる¹²⁾。プラスの用法で用いられる「二依テ」について、出典との関係から、出典漢文にある「依」字をそのまま踏襲したと見られる例(以下、「踏襲」)、「因」「由」「以」のような意味の近い漢字との言い換えと見られる例(以下、「換言」)、出典漢文に「二依テ」と対応する漢字はないが、前後の因果関係に応じて、「二依テ」を付加したと見られる例(以下、「付加」)、「二依テ」が含まれる内容に対応する箇所自体が出典にない例(以下、「対応箇所なし」)に分け、【表5】に示した。非プラスの用法で用いられる「二依テ」の出典との関係も同様に調査し、【表6】に示す。

(23) 「此ノ善根二依テ、汝、浄土ニ可生シ」ト。(今昔・巻十三ノ8) ← 依是善根、生於浄利。(法華験記・上19)

【踏襲】

(24) 其ノ力ニ依テ、狗ノ報ヲ轉ジテ、(今昔・巻十四ノ21) ← 因其善力、轉狗

果報。(法華験記・中53)【換言】

(25) 今生ニ法花経ヲ誦セル功德ニ依テ、遂ニ生死ヲ離レ菩提ニ可至シ。(今昔・巻十四ノ23) ← 今生読誦法華、功德薰習、遠離生死、當證涅槃。(法華験記・上24)【付加】

【表5】に示したように、プラスの用法で用いられる「二依テ」は、天竺震旦部と本朝仏法部では前掲漢文を出典とする説話にそれぞれ13例、49例見られる。例(23)のような「踏襲」の例は、天竺震旦部では2例と少ないが、本朝仏法部では22例と多く見られる。例(24)のような「換言」の例は、天竺震旦部と本朝仏法部にそれぞれ3例、6例ある。例(25)のような「付加」の例は、天竺震旦部と本朝仏法部にそれぞれ3例、2例ある。その外に、「対応箇所なし」の例はそれぞれ5例、19例ある。

このように、「踏襲」以外の例が少なからず見られることから、「二依テ」のプラスの用法は出典に左右されず、自由に用いられていることが窺える。院政鎌倉時代において、プラスの用法で用いられる「によりて」が仏教説話集に多く見られることと、描かれる場面も仏教的な内容が多いことから、この用法は仏教漢文の中の「依」などの用法に充分馴染んでいる僧侶らに受け継がれ、次第に和漢混淆文に定着するようになったと推測される。

【表5】プラスの用法の出典との関係

	天竺震旦部	本朝仏法部
踏襲	2	22
換言	3	6
付加	3	2
対応箇所なし	5	19
計	13	49

【表6】非プラスの用法の出典との関係

	天竺震旦部	本朝仏法部
踏襲	0	15
換言	4	2
付加	0	0
対応箇所なし	9	22
計	13	39

なお、非プラス的用法の出典との関係を見ると、【表6】に示したように、天竺震旦部では、「因」「由」などの「言い換え」は4例あるが、前述したように、中国仏教漢文の「依」は非プラス的な原因理由用法に用いないため、「依」字の直接の「踏襲」と見られる例はない。これに対して、本朝仏法部の出典の中で、法華験記において、「依」字そのままの「踏襲」と見られる例では、プラスの用法では全22例中21例であるのみならず、

(26)「我し、宿世ノ報ニ依テニノ目盲タリ。」(今昔・巻十三ノ26) ←依宿世報、二目忽盲。(法華験記・下122)

【踏襲】

ように、15例見られる「依」の非プラス的用法のすべてが今昔で踏襲されている。つまり、日本の仏教漢文では、プラスの用法と非プラス的用法両方が「依」で表され、仏教漢文系統の用法と和文系統の用法の融合が見られる。これが今昔のような和漢混淆文で自由に用いられるようになった基盤の一つと考えられる。

5. おわりに

以上、古代日本語における原因理由を表す「によりて」を取り上げ、原因理由を明示する用法において、良い結果の原因を積極的に表すプラスの用法を用い始めたのは、漢文訓読、特に仏教漢文を訓読した結果と考えられ、平安時代以降、僧侶らの手による仏教漢文や和漢混淆文に、非プラス的用法と交えて多用されるに至ったことを述べた。

これは、漢文訓読という翻訳行為の中で、加点者が「依」などの漢字によって結び付けられる前件と後件とが因果関係に

あると認識して、「依」などを「ニヨリテ」と訓んだが、漢字「依」などにある「頼る・助く」の語彙的意味に影響され、良い結果の原因を表す機能を持つようになり、「によりて」の表現範囲が広がった結果と考えられる。

日本語の言語形式に漢文訓読の影響があったことについては、早く山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』(宝文館、1935)、大坪併治『平安時代における訓点語の文法』(風間書房、1981)等の研究で指摘されて以降、多くの指摘がある。近年、このような現象について、ジスク・マシュー(2010)等が「意味借用」として原理的に位置づけようとしている。本稿で取りあげた「によりて」のプラス的用法も「意味借用」に基づいているが、仏教漢文の訓読を契機に、用法面に影響があった一例として捉えられる。

注

- 1) ここでいう「原因理由」は、前件の事物・事態が後件事態の発生を引き起こす源となる用法を広く指す。これは前件と後件を因果関係で捉える表現であり、いわゆる「目的」と解される場合も含む。
- 2) 西田(1977)は、「ば」自体が概念化された特定の意味を持つ語ではなく、その前後の文脈の流れから順接、逆接などの解釈がなされるという。また、「に」「て」などの因由性の認定は文脈に依存する度合いが高いことは山口(1980)に指摘がある。
- 3) 「間」と「ほどに」の原因理由用法の成立の経緯や消長について、鈴木(1982)、吉田(2000)、小林(1973)が

詳しい。

- 4) 本稿で利用した資料は以下の通りである。[訓点資料]『西大寺本金光明最勝王經古點の国語学的研究』勉誠社、『古点本の国語学的研究 訳文篇』勉誠社(東大寺本大乘大集地藏十輪經)、『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』風間書房(東大寺本大乘大集地藏十輪經・知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓)、『訓点資料の研究』風間書房(南海寄帰内法伝、妙法蓮華經)、『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』東京大学出版会、『神田本白氏文集の研究』勉誠社、『高山寺古訓点資料第一』東京大学出版会(論語・史記)、『高山寺古訓点資料第二』東京大学出版会(莊子)、『醍醐寺蔵本遊仙窟總索引』汲古書院／[和文・和歌・説話・軍記]『万葉集』塙書房(『万葉集電子総索引 CD-ROM』)、土佐日記・竹取物語・伊勢物語・落窪物語・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・平中物語・堤中納言物語・更級日記・讃岐典侍日記・蜻蛉日記・大鏡・古今和歌集・宇治拾遺物語・徒然草・十訓抄(以上、『日本語歴史コーパス CHJ』)を利用し、本文は新編日本古典文学全集によった)、今昔物語集・沙石集(今昔は『今昔物語集文節索引』を参照し、沙石集は『大系本本文データベース』)を利用し、本文は日本古典文学大系によった)。その他、『高山寺資料叢書第七冊 明恵上人資料 第2』東京大学出版会(光言句義積聴集記)、『三宝絵詞自立語索引』笠間書院、『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院、『仏教説話集の研究 金沢文庫本』汲古書院、『延慶本平

家物語 本文篇と索引篇』勉誠社、『平家物語「高野本」語彙用例総索引』勉誠社、『歎異抄 本文と索引』新典社、『中山法華經寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』武蔵野書院、を利用した。

- 5) 軍等答テ云ク、「我等、大王ノ勅命ニ依テ来レル也」ト。(今昔・卷二ノ23)
- 6) 築島(1963)は、「によりて」を訓読語らしきものとしている。「によりて」は訓読語に頻用される形でありながら、和文にも見出せるものであるのに対し、「により」は訓読文には用いられず、和文では概して重々しい発言の際に用いているという。本稿の調査では、中古和文において、「により」が48例、「によりて」が23例見られる。
- 7) 訓点資料において、訓字「依」は「ヨル」と訓ませたもの、あるいは意味を示したものであると築島(1967)が指摘している。中古以降の古記録では、句末で用いられる「ニヨリ(テ)」は殆ど「依」で表記され、接続詞の「ヨリテ」は「仍」で表記されるように、用字上、一定の原則が見られる。また、今昔と延慶本平家のような和漢混淆文においても、「によりて」を漢字で表記するとき、「依」に統一されている。
- 8) 『論語注』に「因、猶依也」とはあるが、これを基に、「依」に原因理由の意があると認めることは誤りである。注の本文「因不失其親、亦可宗也」に辿ってみれば、この「因」は古来、「たよりにする」の意にとるもの、姻と同じと見るもの、因循の因とみるもの等(宮崎市定著『論語の新研究』岩波書店、1974)、様々な注釈があり、「依」と「因」は必ずしも同意ではない。

- 9) 台湾中央研究院『古漢語語料庫』を利用し、毛詩、論語、孟子、莊子、戦国策、史記、淮南子を調査した。
- 10) 勸請文に使役表現が続く場合、手段方法としても捉えられるが、「功德妙定威神力の故に、〔令〕彼の一切に果実を豊稔(なら)しめたまひ(ぬ)。」(地藏十輪經・卷一388)のように、類似する文脈に「故」が用いられる場合があるため、原因理由として捉えた。
- 11) ここでいう「固有日本語」とは、漢文訓読の影響を受けていない和語(大和言葉)のことを意味している。
- 12) 出典との関係を調査する際には、『三宝感応要略録(尊經閣善本影印集成)』八木書店、『冥報記の研究』勉誠出版、『孝子伝注解』八木書店、『大日本国法華経驗記 校本・索引と研究』和泉書院、『日本靈異記漢字総索引』笠間書院、日本思想大系『法華驗記、往生伝』岩波書店、を利用した。

参考文献

- 小谷博泰(1971)「続日本紀宣命の文章と語法—和漢混淆文の源流として—」『月刊文法』3-5
- 小林賢次(2005)「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』1-3
- 小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94
- ジスク・マシュー(2010)「意味の上の漢文訓読語—和語『あらわす』に対する漢字『著』の意味的影響—」『訓点語と訓点資料』125
- 鈴木 恵(1982)「原因・理由を表す『間』の成立」『国語学』128
- 築島 裕(1963)『平安時代の漢文訓読語

- につきての研究』東京大学出版会
- 築島 裕(1967)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』東京大学出版会
- 西田直敏(1977)「助詞(1)」『岩波講座 日本語7 文法Ⅱ』岩波書店
- 藤井俊博(2003)『今昔物語集の表現形成』和泉書院
- 山口堯二(1980)『古代接続法の研究』明治書院
- 山口堯二(1996)「原因理由表現の推移傾向」『日本語接続法史論』和泉書院
- 山本真吾(2005)「僧侶の書記用漢字—接続詞『これによりて』の用字から—」『日本文学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
- 山口佳紀(1993)「続日本紀・宣命の文体と漢文訓読」『古代日本文体史論考』有精堂
- 楊 瓊(2016)「原因理由の接続表現『ユエ(故)』について—和漢混淆文への展開—」『文化学年報』65
- 楊 瓊(2017)「原因理由の接続表現『により(て)』について—その文化化と文体とのかかわり—」『日本言語文化研究』21
- 吉田永弘(2000)「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」『国語学』203

付記

本稿は第39回表現学会近畿例会における口頭発表に加筆・修正したものである。席上にて多くの貴重なご意見を賜った。ここに記して御礼申し上げる。

(同志社大学大学院生)